

氏 名	鈴 木 敏 正 すずき とし まさ
学 位 の 種 類	農 学 博 士
学 位 記 番 号	農 博 第 278 号
学位授与の日付	昭 和 53 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	農 学 研 究 科 農 林 経 済 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	不 足 払 制 度 下 に お け る 牛 乳 過 剰 の 展 開 メ カ ニ ズ ム に 関 す る 研 究

論文調査委員 (主査) 教授 貝原基介 教授 頼 平 教授 三好正喜

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、昭和40年6月2日公布の加工原料乳生産者補給等暫定措置法に基づく行政措置が施行された前後におけるわが国の牛乳過剰の形成・展開の機作を、生産から消費に至る全過程の統一的把握によって究明したものである。

著者は、第一に牛乳の過剰を単に生乳生産と、牛乳・乳製品消費との問題とするだけではなく、生乳の流通、加工、乳製品貿易、行政的措置などの問題をも含めて、全体的かつ包括的に究明しようとし、対象を生産物だけに限ることなく、生産手段、労働力への波及をも含め、物的側面と価格の側面の統一的把握を試みている。なおこの課題と方法に至る経過として、他の論者による農産物過剰論、とくに牛乳過剰論を要約的に検討し批判している。

第二、牛乳過剰形成の一般的機構を、乳業資本にとっての過剰と、酪農にとっての過剰とにわけて相互連関的に考察し、基本的には乳業資本の過剰投資が乳製品在庫の増大をもたらし、乳業資本にとっての過剰がおこり、生産価格の切り下げにすすみ、それが酪農にとっての過剰となってあらわれるという経過を実証的に明らかにしている。

第三に、この牛乳過剰の動向を基本的に規定している乳牛資本について考察し、不足払制度の下における牛乳過剰の性格を明らかにしている。

第四に、酪農にとっての過剰の展開を、生産物、次いで労働力、さらに乳牛、牛舎、飼料等々の生産手段について包括的に検討している。その過程で、かつてなかったほどの深刻かつ長期的な酪農危機がおこされる機構を解明している。

第五に、生乳流通について、とくに指定生乳生産者団体の性格との関係としてとりあげ、滋賀県の事例によりながら、不足払制度の下における物的流通、乳価体系、生乳流通費用変化の特徴、それらが酪農と乳業資本に与える影響を考察している。

第六に、牛乳不足下の乳業資本の新たな行動を分析し、畜産振興事業団の諸業務の役割を検討し、生

乳不足、乳業資本の過剰という事態の下で生じた種々の形態の乳製品輸出と輸入、ならびに乳業に対する資本の海外からの導入と、海外への進出という併存的事態を明らかにし、それらの相互関係を考察している。

論文審査の結果の要旨

昭和30年代後半におこったわが国の牛乳過剰は、酪農経営および乳業に深刻な影響を与え、その対策として、加工原料乳生産者補給等暫定措置法が公布され、不足払制度と略称される施策がとられるに至った。他方この前後の牛乳過剰問題が多くの研究者の関心をひくようになり、その原因を、酪農経営の不可逆特性とか、小農経営の特質、独占化された資本、過少消費等々におく諸見解があらわれている。

本論文は、この制度の下における牛乳の過剰について、多くの研究成果を批判的に考察し、かつ実証的にその形成・展開を究明したもので、特に次の二点は極めて特徴的である。

1. これまでの研究が、酪農経営経済構造の変質、牛乳・乳製品の過少消費、乳製品輸入の増大等を牛乳過剰の要因とし、それを牛乳生産・消費の周期的変動の一局面として捉えているのに対して、本研究は、その要因に生乳流通の変化、乳業資本の動向、行政的介入等を加え、それら諸要因の機作を動的に位置づけ、かつ物的側面と、価格の側面とについて統一的に考察し、牛乳過剰の形成・展開を一貫して解明している。

2. 牛乳の過剰を、酪農にとっての過剰と、乳業資本にとっての過剰に分けて考察し、さらにそれらを統合して分析的に検討し、乳業資本にとっての過剰が、牛乳過剰の全体的動向を規定していることを実証している。

このように、本論文は酪農経営ならびに乳業経済の全分野において、相互連関的かつ統一的に牛乳過剰を究明し、実証的に解明したもので、これまで殆んどなかった生乳不足と、乳業の資本過剰という事態の下でおこった種々の形態の乳製品の輸入と輸出、乳業に対する海外からの資本の導入と、海外への資本の進出、という併存的動向を先駆的に明らかにし、酪農経営論、農業経営学ならびに農業経済学の発展に寄与するところが大きい。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。